

# História

## 信州からブラジルへ

安曇野市からもブラジルへ移住した人が各地域にいることが、取材で確認できました。また、安曇野市の在外選挙人名簿によると、ブラジル居住者は12人います。この制度は任意であり、大使館に出向くなどの手続きが必要なことから、実際には、さらに多くの居住者がいると推測されます。

ブラジル移住の歴史を振り返ると、移民時期は3つの期間に大別できます。

第1期は1908年の「笠戸丸」移民が始まりです。笠戸丸には165家族、781人が乗船しました。長野県出身者では「矢崎節夫」がいたといわれています。移住者の大半は、日本に帰ることを前提としたコーヒー農場の出稼ぎ労働者でした。しかし、収穫が思うようにいかず、遠い日本に帰れなくなった人がほとんどでした。

第2期は移民最盛期で、1923年ごろの経済不況から始まり、第2次大戦で終わります。そして、この時期から永住を決意する移民が増え始めます。これは1923年に始まった信濃海外協会のアリアンサ移住地建設が大きな役割を果たしたといわれています。この団体の総裁は長野県本間知事でした。そして「コーヒーよりも人をつくれ」という人に重点を置いた方針が、日本移民を永住志向に変えるきっかけを作りました。

第3期は戦後で、政府の渡航費全額補助が制度化されました。グアタパラ移住地建設では長野県を含む7県が参加。送業業務は県農政部が担当していました。

戦前、戦後と合わせると長野県からは5,869人がブラジルに移住しています。

幾多の歴史を乗り越え、日系人はブラジル社会に完全に根を下ろしました。国内での日系人の評価は非常に高いようで、現在も総人口の1%に満たない日系人が、最高学府・サンパウロ大学の学生の約18%を満たすなど、「勤勉」な傾向が現在も受け継がれています。

そして再来年は、日系移民100周年を迎えます。



1964年当時のサンパウロ州郊外のピフ畑。左は明科総合支所勤務の平川千夏の父。——ブラジルの大地に夢を紡いだ。

9:30 >>  
おばあちゃんと一緒になら大丈夫。



豊科保健センターで、孫のサユリちゃんの予防接種の日。仕事で来られないお母さんのピンチヒッターはおばあちゃん。



10:00 >>  
接種が終わり、タクシーで帰宅。「お疲れさまでした」。



# A história do senhor Kaneshi

15:00 >>  
きれいな好きの豊子さん。キッチンがいつも整然としている。



14:30 >>



午後は少しだけ眠る。その前には必ず活字に目を通す。西村京太郎や内田康夫が好み。

も建てられた。豊子さんは、そんな日系人社会の中で教育を受けた。失意の中にいた盛達さんは、同僚の紹介で豊子さんに出会った。日本的な魅力を引き継ぐ豊子さんは、盛達さんの生きる希望となった。休みの日は、鉄道で1時間半かけて豊子さんに会いに行った。1年間の交際を経て、2人は結婚した。結婚してからはサンパウロ市カハ地区に引っ越し、3人の子どもを授かった。当時のブラジルは所得格差が激しく、2割ほどの富裕層と多くの貧困層が社会を構成していた。盛達さんは働き詰めの毎日を送ったが、給料はほとんど上がらない状態が続いていた。食費もままならないこともあったが、近所同士のカンパや励ましに支えられた。何とか子どもたちを高校まで行かせようと、家族は団結した。

## 再び日本へ

1989年7月、57歳になった盛達さんは、再び日本の地にいた。神奈川県の大手自動車会社で働いていた。この年、ブラジル国内のインフレ率は、過去最高の2,800%に達した。100円で買ったパンが、2800円になるような状況だった。まだ学生だった3人の娘たちを支えるためにも、日本国籍を持つ盛達さんは、「出稼ぎ」に出る決意をした。娘たちは日本からの送金を頼りに高校を卒業し、それぞれ独立した。そして日本に出て7年後、娘たちも日本で働きたいと言うようになった。現在、盛達さんは、豊科のアパートに妻、長女とともに暮らし、田沢団地には二女夫婦も暮らしている。仕事は引退し、昼間は孫の面倒を見たり、家

事を手伝ったり、花を育てたりして過ごしている。娘たちは今のところ、サンパウロに帰りたいとは言わない。各地を巡りながら運命を切り開いてきた盛達さんは、「おれにそれを言う権利はない。ただ、がんばれと言うだけ」。遠い日の自分と重ね合わせている。

## Episódio 2

エピソード 時代

二女ユキさんの住む田沢団地へ——。この日は部屋の掃除当番。

